

- 1 派遣期日 平成 27 年 7 月 19 日 (日)
- 2 研修先 学校名 (会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 〒 110-0012 東京都文京区大塚 3 - 2 9 - 1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp>
- 3 研修内容

研究会テーマ

「変わる自分を楽しむ算数授業づくりー今、子どもたちは素直に考えているかー」

(1) 公開授業

- ① 2 年「かけ算」 筑波大学附属小学校 教諭 中田寿幸

○研究主題

10 のまとまりを元に、 $5 \times \square$ のかけ算を考える活動を通して、かけ算はこれまでの数え方やたし算の考え方と同じ考え方でできるということを感じられる授業をつくる。

○本時の目標

10 のまとまりを元に、 $5 \times \square$ のかけ算の答えを求めていく方法を考える。

○展開

- ・スイカがたくさん並んでいる絵を見る。
- ・スイカが全部でいくつあるかかけ算の式に表す。
- ・スイカの数を増やして考える。

初めに電子黒板でスイカが並んでいる絵を見せて、子どもの興味を引きつけていた。「このスイカは全部でいくつあるかな？」という問いに、子どもたちは自分の考えを発表したくてしょうがないという様子だった。求める式とその理由をノートに書き発表し合っていた。「横に 6 個ずつ、縦に 5 個ずつ並んでいるので、 $6 \times 5 = 30$ で 30 個」、「5, 10, 15, 20, 25, 30」、「10 のまとまりが 3 つで 30」などの考え方が発表された。次にスイカの数を増やして、横に 8 個ずつ縦に 5 個ずつ並んでいる絵で考えた。

研究協議では、「児童はいろいろな考え方で考えていたが、本時の目標には迫れなかったのではないか。」「5 のまとまりや 10 のまとまりで見ることができない児童もいたので、図をプリントして配るか、図をかかせる作業を取り入れたほうがよかった。」という意見が出ていた。

- ② 3 年「かけ算」 筑波大学附属小学校 教諭 夏坂哲志

○研究主題

子どもの気づいたきまりをもとにして、 $(2 \text{ 位数}) \times (1 \text{ 位数})$ の計算の仕組みを見直す場をどのようにつくるか。

○本時の目標

- ・ $(十いくつ) \times (1 \text{ 位数})$ の計算で、かけられる数をかける数の一の位を入れ換えた時の答えの変わり方に気づく。
- ・ $(2 \text{ 位数}) \times (1 \text{ 位数})$ の計算の仕方を見直す。

○展開

- ・ $1 \square \times \square$ で答えが一番小さくなるように数を入れてみよう。
- ・ $1 \square \times \square$
 \square , \square , \square , \square の 4 枚のカードがあります。2 枚のカードを左の式の \square に入れて、答えが一番小さくなる式にしましょう。
- ・調べてみる。

・一番大きな答えになる式になるのはどんなときか調べよう。

初めに、□に入る数字の制限をせずに考えさせていた。1□×□の答えを一番小さくするには、0を入れればよいということに気づく。かける数が0だと、かけられる数が何でも答えが0になってしまうことに子どもたちが気づいた。そこで、入る数を制限した。□に入る数は2と3だが、 12×3 と 13×2 の式では答えが同じではないかという意見が出た。確かめたところ、答えが10違うことが分かった。そこから、一の位の数と十の位の数を入れ替えるとどうなるかを考えていった。

(2) シンポジウム 筑波大学附属小学校算数部OB

- 公開授業 2年「かけ算」 筑波大学附属小学校 教諭 中田寿幸 について
- 研究授業のあり方について
- 授業づくりについて
- 協議会の開き方について

多くの人数が参加する協議会では、褒めて終わりだったり、全員が意見を言えなかったりすることがある。協議会では年上、年下関係なく、厳しい意見も含めて様々な意見を交換させていくことが必要である。

(4) 講演「子どもの素直さが活きる授業づくり その発想の転換」

筑波大学附属小学校 教諭 田中博史

○考える必要性

1年生の子どもたちとじゃんけん列車のゲームをしたとき、当たるためにはどうすればいいか考えて作戦を立てて行動していた。必要があれば子どもたちは自ら考えようとする。算数でも同じで、導入でどれだけ考えたいと思わせるかが大切である。

○発表するときの方法

子どもたちが、クラスみんなの前で発言するということは、とても勇気がいることである。発言するために、抵抗を少しでも少なくしてあげるといい。

ペアトークで、発言したことを認められるとモチベーションが上がる。それが友達からだとなおさらである。

グループで話し合ったときには、「グループで話し合ったことで、いいな、おもしろいなと思ったことを発表しよう。」とすると、自分の考えを発表するより発言しやすい。

授業の中で、今、考えたことを発言するときには言い方は何でもいいのではないか。発表の仕方が決まっていればそれに基づいて発表することも大事だが、それにとらわれすぎると、子どもたちが発表する内容を「忘れました。」と言うことが多い。その場で思いついたことを言うときは形にとらわれずに言わせてもいいのではないか。

○子どもたちに考えさせるためには

通り一遍の授業が子どもを考えなくさせている。教師が説明をしていると、子どもたちは考えなくなる。まとめを間違えて書くなど、子どもが考えるようにしむけることが必要である。

4 感想

今回の研修では、子どもたちが考える授業とは何かということを考えさせられた。児童が考えたくなるような課題を設定すること、考える手立てを用意しておくこと(図など)、発表の場をつくることが重要だと感じた。また、発表する際にできるだけ抵抗を少なくしてあげるような配慮が必要なことが分かった。

今回、授業を参観するなかで、子どもたちがとても生き生きと授業に臨んでいる姿が印象に残っている。自分の考えを発表したくてしょうがないという気持ちが伝わってきた。これは、毎時間の授業で培われたもの、学級経営が関わっていると感じた。自由に意見を言える雰囲気、意見を言っても受け入れられる安心感のある学級をつくり、子どもたちが生き生きと学習に取り組めるようにしていきたい。